

アメリカにおけるオーブン・エデュケーション（その二）

白井堯子

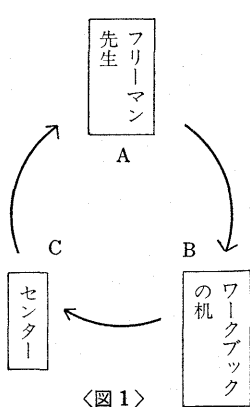
IGEの実際

図1のように三つの勉強場所をグルグル廻るわけで、よく順序を間違えないものだと思心するほど外来者には目まぐるしい。

たちは結構この移動を楽しんでおり、引越し好きのアメリカ人にふさわしい行動学習法である。

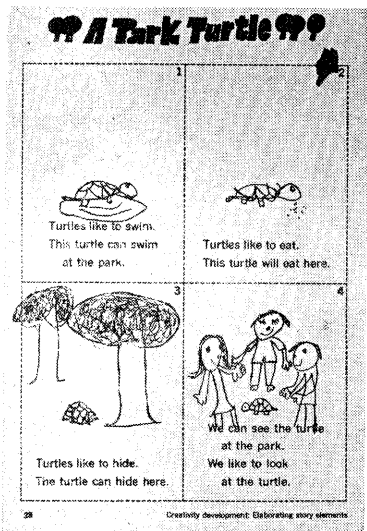
ショウ・アンド・テルで皆の好奇心が引き立てられたところで、英語の時間が始まった。（この学校では、ランゲイジ・アートの時間、つまり言葉の使い方の時間という）前回に記したように、六歳児を中心としたユニットAの約百人の子どもは、英語の能力に応じて五つのグループに分かれ、晶子は中程度のバナナ組（十五人）に入っていた。このバナナ組（指導者はフリーマン先生）は、更に能力別にABCに三分され、授業を受けるのである。つまりほとんど同程度の学力の子ども五人が一組となり、

まず晶子の属するAグループはフリーマン先生のところでテキストを読み、その間Bグループはワークブックをやり、Cグループはセンターと呼ばれる別の所に出向き、そこでセンター専属の先生とゲームをやったりして単語のつづりを覚える。三十分たつと、Aグループはテキストで読んだばかりのことについてワークブックをやるためにワークブックの机に移り、同時にBグループはセンターへ、Cグループはフリーマン先生のところへ動く。また三十分たつと皆が移動して一巡するわけで、子ども



〈図1〉

三十分ごとに新手を迎える先生の方は、文字通り応接にいとまがなく大変だと思いが、一回の人数が五人で同程度の生徒だからうまくやれるのだろう。フリーマン先生は、まずテキストを一人一人に読ませ、発



〈写真 1〉

遊びながら勉強する。時には母親が来て一緒に遊んだり、リラックスした雰囲気や学習ゲームを楽しむ。授業はこのようにティーム・ティーチングによって変化がつけられ、すべてが子どもの能力に合わせて行なわれるため、落ちこぼれ

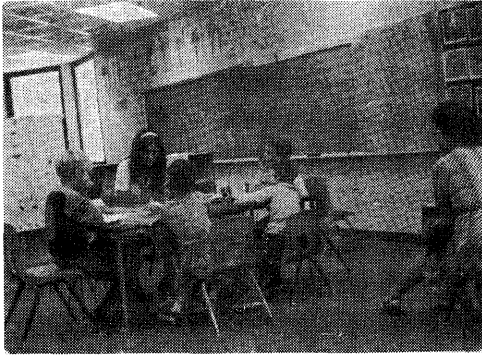
音とつづりの関係、文の内容などをテキパキと質問した。何しろ五人だから、どの子どもも何回も質問され、理解度も弱点もちどころに明らかになってしまう。そこで一人一人の進度に合わせ、次の机で自習すべきワークブックのページが指定される。写真1はその一例で、英文に合わせて絵を描かせるもの。子どもの読解力と想像力がわかるわけだ。ワークブックは毎回先生によってチェックされ、間違いはすべて徹底してやり直しを命じられる。そして、場

合によっては、その子どもが理解できていない部分をしっかり身につけさせるために、その子どもに応じた特別の問題が学校で、あるいは宿題として課せられるのだ。（だから宿題は、その子どもによって、与えられる時も内容も全部違う。）セントターの目的は、単語のつづりなどを正確に覚えさせることで、ゲームの教材製作には親が動員され、例えば私の夫は絵に合わせて単語の母音を選ぶ教材を造った。子どもたちはこうして親の手造りの材料で

が放置されることは全くない。これは晶子のような外国人には特に有難いことで、勉強のことは学校に任せてほしいという校長先生のお言葉通り英語を全く家では教えなかったのに、短期間で発音もつづりもドラマリと身についたのは、まさにこの「集団的個人指導」のおかげだというべきだろう。もし画一的授業であつたら、教室で孤立してアメリカ人との違和感に苦しんだろうし、一人一人の先生とこれほど密接な関係を持ちえなかったと思われる。

英語に続いた算数の授業も同様なやり方で行なわれた。（ただし、セントターの代りにエクステンション・ルームが用いられ、算術ゲームなどが行なわれた。）算数も能力によって生徒を組分けするから、日本人の本領を発揮して晶子はトップ・グループに入った。先生はとてもおしゃれなジョン・スン先生である。（次頁の写真2はその授業風景で、横で見学しているのが筆者。授

業程度はもちろん日本よりは低く、しかも同じような計算問題を何回も練習させるので、日本のように母親や塾が介入する必要は全くなく、有難いことであった。日本の一年生の内容と比べると、文章問題が非常に少ないこと、零の概念や不等号の記号を早くから教えることが大きな違いといえる。



〈写真2〉

ランチと映画

これで午前のカリキュラムが終り、待望の給食時間となる。(画一化の嫌いなアメリカだから、自分のお弁当を持っていくこともできる。)給食の献立は二種類あり(一種類はハンバーガー)、朝のうちに選んでおく。私たちも申し込んでいたので、先生や子どもたちと共にキャフェテリアで並んでランチを受け取り、にぎやかに試食した。当日のメニューは、ホットドッグ、ほうれん草のバターいため、マッシュポテト、アイスクリームとミルクで、栄養も量もたっぷりである。値段も四十セント(約百円)と格安だが、デザート以外は味の方はあまり良くないためか、子どもたちはたいい半分位残していた。日本のように「残さないように」というような指導はないので、子どもたちは実に気楽に食物を捨て、飢

えた他国の大勢の子どもたちのことを思うと、この子らはあまりに恵まれ過ぎているようで、勿体ない話である。

食後は、窓を暗くし電燈を消して、一せいに昼寝の時間だ。子どもたちは机上でうつぶせに寝るわけだが、実は皆薄眼を開けていて、小さな声を出したりし、眠る子はいない。だがこの間先生たちは、ワークブックの採点をしたり次の授業の準備をする。

この休息時間が終ると、毎週金曜日には映画が上映される(見学した日は丁度金曜日であった)。子どもたちはもちろん映画が大好きだが、それ以上に楽しみなことは、先生が紙コップに一杯くれるポップ・コーンである。アメリカ人は街の映画館でもよくポップ・コーンを食べており、映画とポップ・コーンは小学校でも切り離せない。私は遠慮したのに、夫は子どもたちと同じようにポップ・コーンを食べながらイ

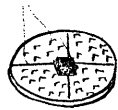
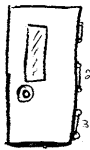
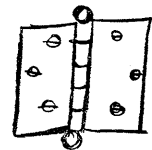
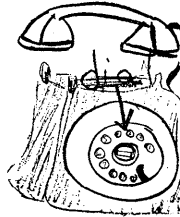
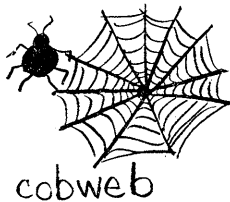
ソップ物語などの映画を楽しんだ。帰宅後皆で映画のことを話し合ってみると、口を動かしながら見た夫と娘の方が映画の内容をよく覚えていたのだから、誠に不思議であった。

こうして、小学校の一日は終わった。実に楽しい一日で、朝から行動を共にした私たちに對し、子どもたちはすっかり親近感を感じて、白人の子も黒人の子もまったりついて、カム・アゲインノと別れを惜しんでくれた。本当に、このままこの学校に入れてもらって、英語をこんなに楽しく教えてもらったらどんなに良いだろう。

英語の個人指導

晶子はこの学校の全部が好きだった、特に喜んだのは外国人のための英語の個人授業だった。アメリカ、特に私たちが住んでいたような大学都市はとても国際的で、

〈写真3〉



Akiko

小学校にもいろいろな人種の子どもが入学するわけだ。その少数の子ども、またアメリカ人でもあまりうまくしゃべれない子どものために、ランゲイジ・アートの一環として特別の英語の個人指導がある。担当のサムズ先生はそのための専門教育を受けた女性で、いつも晶子を優しく迎え、子どもの気持ちをとくほぐすことから始まって、正しい発音で話せるように、単語の数を増やすように、と一対一で指導された。圧巻

はそのテキストであって、子どもの興味に応じて全部先生が自分でつくって下さる。

絵も字も実に上手な先生で、写真3はそのほんの一例だが、自分で文を書き、それに合わせて絵を描き、色をぬり、毎週の教材を集めると本当に見事な手づくりの絵本になった。こうして晶子は単語、発音、文章表現を教わり、やがて沢山の物語を読み、英語が上手になると星印のシールをもらったり、先生のお手製のクッキーをもらった。そして先生からは毎週私宛に簡単なメモが届いた。

“今日、アキコは色や食物の名前を使う文章づくりが良くてきた”

“今日、アキコは『魔法のつぼ』の話を読み、それを自分で繰り返し話することができた”

などである。

サムズ先生の手づくりの絵本（これを本当の手本と言うのだろう）と手紙は、今も大事にとってある。それは子どもの思い出がその一ページ一ページにこめられているというだけでなく、遅れた一人の子どもに示されたアメリカの公教育制度の最良の実例として、晶子には生涯の記念となるだろう。

通知表——進歩状況報告

『アルプマール郡公立小学校コンティニュアス・プロGRESS・レポート・カード』という通知表には、次のような説明がある。

“児童は中学校に入る前に、英語と算数の分野で常に進歩を続け、定められた課程を立派に終らなければならない。この課程を終了するための期間は、定められていない。

い。それは子どもによって異なる。

次に示す図表は、この通知表の大事な部分である。この図表は、英語と算数の進歩の状態を示す。斜線部分もしくは数字が、あなたの子どもが終了した課程を示す。

小学校生活の五年間で、英語は十一段階、算数は五冊のテキストを終らさせることが、われわれの目標だ。しかし、ある子どもはこの目標を達成するのに五年以上かかるだろうし、また他の子どもは、目標を越えて進むだろう”

次頁の図2は、晶子が一年間の学校生活を終了した時に受け取った通知表の一部である。すなわち晶子は英語は六段階まで、算数は二冊目のテキストの真中で終わったことを示す。I G E だから進歩は子どもによってまちまちで、早い子どもは四年間で目標を終え、最終学年では中学段階の内容を学ぶ例も出てくるわけだ。

さらに通知表（図3）には、次のような

説明がある。

“学課と社会性などのプロGRESS・キイは、

E—コンシスタント・エクサランス（一貫して優秀）

P—プロGRESS・アクセプタブル（進歩が認められる）

X—ディフィカルティ・イン・デイス・エアリア（この分野では不可）である。

この印を他の子どもと比較しても意味がない。二人の子どもが同じEをとっていても、その子どもたちは違った段階、違ったテキストで学んでいるのかもしれないからである”

つまり、それぞれの子どもの進歩状況と、その段階における評価が両親に報告されるのであって、その子どものクラスにおける相対評価などは全く記されていない。親も自分の子どもの進歩状況を確認するだけでなく、日本におけるように近視眼的に他人

〈図2〉

英語のプログラム

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

8	9	10	11	12
---	---	----	----	----

算数のプログラム BOOK 2

Book I	Book I	Book II	Book II			
1-15	16-28	1-7	8-16			

--	--	--	--	--	--	--

〈図3〉 —通知表—

報告の時期	1	2	3	4
英 語				
読 み				
内 容 理 解				
聞 く				
書 く				
スペリング				
話 す				
算 数				
概念の把握				
計 算				
問題を解く力				
絵 画				
音 楽				
社 会				
理 科				
体 育				

社 会 性

(良き市民となるために)

指示に従う				
自 立 性				
協 調 性				
責 任 感				
自 律 性				
他人の権利の尊重				
目上をうやまう				
礼 儀				

出席日数				
欠席日数				
遅刻日数				

の子どもと比較することは少ないようである。

通知表は一年に四回親のもとに届くが、いつも担当の先生からの評価がついている。一般にアメリカの教師は子どものことを責めるものなので、その例として晶子に対する評価を紹介しよう。

○ホームルームの先生より

“アキコの新しい環境への適応能力は素晴らしいと思う。ここ数か月の間に、急に英語をよく話すようになった。英語と算数における彼女の進歩状況は優れている。彼女は、大変はがらかな子どもだ。私のクラスの前メンバーの一人に彼女がいることをうれしく思っている。御両親の御協力にも感謝している”

○英語の先生より

“アキコは来週から三段階のレヴェルの教科書に入るようになっていた。彼女の文章の把握力は優れている。全く意味のわか

らない言葉にぶつかった時にも、今までに習った知識を使ってよく努力している。彼女ははじめに静かに勉強する子どもだ”

“アキコは大変注意深く勉強している。

新しい単語がでてきた時には、それを私が紙に書いてお家へ持たせるので、お家でも注意してほしい。彼女は英語の時間に良くやっているが、依然としてまだ少しはにかみやである。しかし、以前に比べればずい分話すようになった。われわれは彼女の特技のオリガミを楽しんでいる”

“アキコと一緒に勉強できることを楽しんでる。アキコは良く勉強している。ワークブックはほとんど教師の助けなしにやることができる。彼女は一生懸命努力するので、その出来具合は、とてもきちんとしている。彼女の進歩状況に私は満足している。彼女は大変礼儀正しい女の子だ”

○算数の先生より

“算数における彼女の進歩状況に満足し

ている。彼女は非常に正確に問題を解決する。しかし、このことは彼女の問題解決のスピードを落とさせているようだ。彼女の概念の把握力は大変優れている”

“アキコは引き続いてよく勉強している。われわれは、今、特にフラッシュカードを使って勉強している。彼女と一緒に勉強できるのは喜びである”

なお、英語、算数における能力別グループの前メンバーは、一年に二度入れかえがなされること、また、能力があるという評価を受けた子どもは、スキップ制の適用を受けることができることを記しておかねばならない。たとえば晶子の場合、英語は四段階目を終了の時点で五段階目をスキップして六段階目に入ることが許された。

次回に、PTAのこと、そしてオープン・エデュケーション全体についての感想を述べてこの報告を終了したい。(つづく)

(慶応大学)